セーヌ左岸そだち

フランス式感情教育

フランソワーズ・モレシャン

セーヌ左岸そだち——フランス式感情教育
昭和五十六年七月　六　日　第一刷発行

著　者　フランソワーズ・モレシャン
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
京都市南区西九条北ノ内町一一　〒六〇一
電話　〇七五—六八一—四四三一
東京事務所　〇三—二九五—九二一一
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　合資会社村上製本所
© Françoise Moréchand 1981 Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

セーヌ左岸そだち

フランス式感情教育

フランソワーズ・モレシャン

故土居通夫氏に捧ぐ

セーヌ左岸そだち——フランス式感情教育

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

構成・執筆協力　松井　久子

屋根裏部屋に猫がいて、
モンパルナスの何処か
屋根の下で、或る日、私は生れた
はじめて、この目を開いたの

《雀のように》より
Comme un moineau.

第一章《雀のように》
Comme un moineau.

このシャンソンはピアフが、まだ街頭で歌っていた頃、好んで歌っていたそうです。私はこの歌の主人公やピアフと較べると、ずっと幸せな、愛情に溢れた少女時代を送りました。でも〝モンパルナス〟と〝猫〟――それは、私の生まれた風景と全く同じなのです…。

眠りたくない、と思う夜があるものです。ベッドに入って眼を閉じたとき、なぜか「今夜は眠りたくない」と思う夜があるのです。いましがた幕を閉じたばかりの今日という日を、心地良い疲労と深い安堵のうちにたどりながら、夜の静けさをじっくりと味わうのが私は好きです。

眼を閉じたまま、耳を澄ましていると、遠くかすかに時計の音が聴こえます。

コチ、コチ、コチ……。

そしてゆっくり眼を開くと、私の部屋の青い闇の中に「時間」という生きものがつぎつぎと流れて行くのがわかるようです。

整然と隊列を組んで、少しも乱れぬ歩調で、私の前を歩いて行く恐ろしい生きもの——時間。私は突然、父の不在を思います。

世界中、もう何処を探し歩いても、私の愛する父、ジャン・マリーという男はいないの

だと思うと、時の非情さに涙する自分を、今夜もなだめることができません。

でも……。いまはすでにこの世にいない父が、夜ごと運んでくれるこのノスタルジックな気分は、私の枕をただ濡らすためのものばかりでもないのです。

一つの映画を見るように、私の眼の前につぎつぎと鮮やかな色を持って現われる幼い日日の記憶。それに酔いしれることは、充分甘美な経験です。そしてさらに、「私とは何なのか？」と自らに発せられる問いかけに、とても見事に、正しい答えをみつけてくれることもしばしばです。

私はどうして、AよりもA'の方が好きなのかしら？　私はどうして、こんな考え方をするのかしら？　私のこの性格上の欠点はいったいどこから来てるのかしら？——日常生活の中でたびたびぶつかるそれらの疑問についても、大半の答えが子供の頃の思い出の中に隠されているのです。

私は今夜も、私を包む青い闇の中でじっと息をこらします。

やがて私の部屋がゆっくりと模様変えをはじめ、私の眼には懐しいモンパルナスの部屋がはっきり見えて来るのです。

ベージュにレンガ色の幾何学模様の入った懐しいカーテン。母が「あなたの生まれる

前、モロッコまで行って買って来たのよ」と言っていた自慢の調度です。絨氈も生成り色のアラブの民族調。「絨氈を汚さないでね」と母が口癖のように言ってましたっけ。壁にはマリー家のひいおじいさんの肖像画、家具も、ピカピカに磨き抜かれた先祖代々の品。鈍い光を放つ金の燭台と美しい花……。

部屋中のすべてのものが、すっかりモンパルナスの頃のまま、ベッドの私を包みます。もう、部屋の外は私の大好きな東京の夜景ではなく、美しい曲線を描くカテドラルの屋根。アパルトマンの前の通りには、アカシアの木が白い花を咲かせていることでしょう。

時計の音はもうまったく聞こえなくなりました。かわりに……

「フランソワーズ」

と、低く歌うような母の声がよみがえります。

「ボンジュール、プチット」

毎朝頬ずりをしてくれた、父の肌の温かさまでわかります。

もう大丈夫。私はもうなんの苦もなくあの日の自分に戻ることができて、いつまでも心ゆくまで、記憶の中に遊ぶことができるのです。なんて不思議なんでしょう。生まれたばかりの、まだもの心つかない日々のことまでも、母が繰り返ししてくれた思い出話が、い

までは私自身の記憶であるかのように、鮮やかな映像となって現われるのですから……。

三月。パリはようやく長く厳しい冬を終えて、街中が「ウーン」と伸びをはじめたところです。モンパルナスのアパルトマン、六階の窓からしのび込む光は、まだ少し臆病な顔をしています。マリー家のいちばん陽の当たる部屋、その白い絨氈の上にちょこんと置かれているのは、ピンクのお布団を敷いた小さな揺り籠。その中でスヤスヤと眠っているのが、生まれたばかりの私。マリー夫妻が待ちに待って、やっと授かった彼らの新しい家族です。

赤ちゃんの揺り籠の隣りには、もうひとつ、もう少し小さなバスケットが置いてあり、こちらにも三匹の仔猫が、身体を寄せ合って眠っています。そしてふたつの籠の間で、優しい眼をしてかわるがわる左右を見ながら、じっと座っているのが、私のミネット！　仔猫たちのお母さん。このときから十年間、いつも私の最愛の同志であった懐しいミネットです。

白とグレーのフワフワの毛、上品な顔立ち、聡明なブルーの瞳。私はいままで、あの時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のミネット以上に気品と賢さを兼ね備えた猫を見たことがありません。人の気持ちのわかる、それでいてつつましさを持った、それは完璧な猫なのでした。

私が生まれたとき、ちょうどミネットも数日前に母親になったばかり、動物の自然な母性愛にめざめた彼女は、三匹の仔猫と一緒に人間の赤ちゃんであった私にも、充分な愛情を注いでくれるのでした。

「子供を産んだばかりの猫は防衛心が強いというわ、赤ちゃんを傷つけなきゃいいけど」母の心配をよそにミネットは、私と会うなり白いベビー服をペロペロと舐めて親愛の情を表わしたといいます。

「やっぱりミネットは賢いわね。そうそうこれからは、フランソワーズの乳母になってもらいましょう」

以来、私と仔猫たちのふたつの籠は窓辺に並べて置かれることになり、ミネットはそのまん中で、一日中私たちを見守ってくれました。

ときどき、仔猫たちが眼をさまし、か弱い泣き声を立て合います。すると母猫ミネットはすぐに子供たちの籠に首をつっ込んで、優しく全身を舐めてやるのです。それでも泣きやまないときは、お乳を飲ませて子供たちの欲求に応えます。やがて人間の赤ちゃん、フ

ランソワーズも泣き出しました。ミネットは仔猫の籠から離れ、もうひとつの籠をのぞき込むのですが、どうしたら泣き止むのかがわかりません。不安になり、赤ちゃんが可哀相になって、隣りの部屋で絵を描いている母の元へ助けを求めに走ります。膝の上に乗って母の顔を見上げながら「フランソワーズが泣いてるよ」と告げるため、ミャーミャー泣くのです。

「大丈夫よ、ミネット。赤ちゃんはね、泣いたらすぐに抱くようなことをしてはいけないの。ミルクの時間にもまだ三十分あるし、お腹がすいても、そのときまでは駄目」

赤ちゃんに抱き癖をつけてはいけない。食事時間は規則正しく守るべきである、といういまの日本のお母さん達の間で流行の育児方法が、パリではちょうどこの頃に言われはじめたのでした。私の母は、動物の自然な本能による育児よりも、新しい育児書に書かれてあることの方を信じたのです。

ミネットの育て方と母の育て方、どちらが正しいかを一概に言うことはできません。ただ、私が少し大人になってから、そのエピソードを母に聞かされたとき、ミネットの母性愛の方を支持したい気持ちになったことは確かです。そして私自身、娘のアガタを産んだ

とき、育児書も読まず、母の言にも従わず、ミネットの育児法の方を真似てみました。その方が私の感性には自然でしたし、ある意味で新しさに対する反発もありましたから……。

さて、結果はどうだったでしょう。もちろんそのことだけが私とアガタの性格の違いを決定づけたとは思いませんが、ふたりの個性はとても大きく違います。いくつになっても、私は人の愛情を探している自分を意識することがしばしばです。私はこの人に好かれたかしら、解ってもらえているかしら……と落ち着かなく不安がる癖があります。アガタにはそれがありません。彼女はいつも自分のまま堂々として、人の顔色にはまったく無関心で平気です。そんな娘の性格を「よかった」と半分羨ましく眺めながらも私は改めて大好きな天国にいるミネットに「ありがとう」と、心をこめて感謝の言葉を贈るのです。

母の性格と生き方はその育児法に象徴されているように、当時のパリでは最も新しいタイプの女性だったように思われます。画家を志し、独学でエコール・ド・ボザールというパリで一番の（といえば世界で一番の）美術学校に学び、卒業後は自分の絵を描きながら、小学校の美術教師をする働く女性でした。二十五歳のとき、エンジニアである父と結

ばれてからも仕事を続け、定年になるまで三十五年間も職業を捨てることのなかった女です。

二十五歳のジャンヌと三十歳のジャン。

結婚をするとすぐに子供をと望んだのですがふたりの間には、以後十年も赤ちゃんが授からなかったのです。

子供のいない期間、彼らは思う存分自らの知的欲求を満たすべく、自由で進歩的な精神生活をエンジョイしました。それぞれの仕事を終え、夕食を済ませた後は毎晩映画や演劇や、お友達とのパーティーへと出かけ、共通の趣味のために時を有意義に費しました。

「僕たちふたりの生活はお世辞にも裕福なくらしとは言えないけど、いい友達、たくさんの趣味には恵まれているね。これでふたりの間に子供がいたら、本当に何も言うことはないのだけれど……」

父の言葉に母もまったく同じ思いで、結婚三年めの頃からふたりの病院通いがはじまりました。

「おかしいわ、また今度のお医者さんも何も異常はないというの。仕方ないわね、きっと神様はジャンと私の仲が良すぎるので、邪魔を入れないでおこうと思っていらっしゃるの

よ」

そうやって十年、もうふたりがほとんど諦めかけていたところ、母のお腹に私の小さな生命が宿ったのです。父も母も、嬉しさと照れ臭さと、ほんとうにほんとうかしら、という不安とが複雑に混ざり合って、周囲の人達にもそのことをなかなか報告できずにいたようです。

毎週一度、サンドウィッチとビールのささやかなパーティーを開いて、気の合った数組のカップルが夜遅くまで芸術論に花を咲かせる。ふたりとも、その仲間たちと過ごす時間を何より大事にしていたのですが、母はお腹が目立つ頃になると、パーティーへの参加をぷっつり止めてしまいました。そして、誰にも内緒でこっそり私を産んだのです。この話はいかにも私の両親らしいやり方、彼らにはあるウィットに富んだ企みがあるのでした。

「この頃、ジャンとジャンヌはどうして来ないのかしら、病気してるんでなければいいけど……」

親切な友人たちが心配をはじめた頃に、マリー夫妻から一通の招待状が届きます。

ごぶさたしていてごめんなさい。
今度の日曜日の午後、私たちの部屋にいらっしゃいませんか？
お茶とケーキしかありませんけど……

電話のなかった時代、お互いの自由な行動をすっかり認め合った仲間たち、それだから実現したふたりの遊びです。

当日友人たちはもちろん一人の欠席者もなく、久しぶりに会うジャンとジャンヌのパーティーに出かけました。そして、彼らが居間に入ると、クッションの上に小さな赤ちゃんをみつけて……ビックリ！　という企みは、見事成功したのでした。

「まあ、ジャンヌ！　なんてことでしょう。こんなに素敵な事件のあったことを、私たちは誰も知らなかったなんて！」と、お友達は大騒ぎ。

私は賑やかな嬌声と笑いの渦の中で、はじめての社交的な出会いをしたのです。

「可愛いでしょう。フランソワーズと名付けたの。これから私たちと同じように、この新しい仲間を愛してね。ジャンは男の子が欲しいと言っていたんだけど、私は女の子でよかったと思っているの。私の縫った服を着せて、ピアノやバレエを習わせて、上品でおしゃ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com